The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スワヒリ語における「～ハ～ガ」構文および類似する構文
Author(s)	米田, 信子
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2016, 27, p. 17-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71114
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スワヒリ語における「～ハ～ガ」構文および類似する構文[1)]

米田　信子

0. はじめに

スワヒリ語は、アフリカ大陸赤道以南に広く分布するバントゥ諸語のひとつで、タンザニアとケニアを中心に東アフリカで話されている。スワヒリ語では、日本語のいわゆる「～ハ～ガ」構文（以下「ハガ構文」）にあたる(1)~(3)のような主題文を作ることができる。

(1) *Kitabu hiki baba yangu a-li-nunu-a.*　（米田 2015:68）

本 7　この 7　父 1　私の 1　SM1-PST-買う-F

「この本は私の父が買った。」

(2) *Mimi kazi u-li-yo-ni-it-i-a hapa i-me-kwish-a.*

1SG　仕事 9　SM2SG-PST-RM9-OM1SG-呼ぶ-APPL-F　ここ　SM9-PRF-終わる-F

「私は君に（そのことで）ここに呼ばれた仕事が終わった。」　（中島 2000:25）

(3) *Tembo mkonga wake ni mrefu.*

象 9　鼻 3　その 3　COP　長い 3 [2)]

「象は鼻が長い。」　（中島 2000:25）

(1)~(3)はいずれも、「～ハ」にあたる要素すなわち主題と、「～ガ」にあたる要素すなわち主語の両方が文中に現れている。主題が文頭に置かれ、後ろに続く主語と述語がその主題について解説するという構造である。中島は、「主題・主語・述語」という語順から、この

[1)] 本稿は『日本語学』34-12 に掲載された「スワヒリ語の場所格の主題化」(米田 2015)にさらなる論考を加えたものである。例文およびその説明等には重複するところもある。

[2)] 本稿で用いる略語は次のとおりである。APPL＝適用形派生接辞、COP＝繋辞、F＝語尾、FUT＝未来、LOC＝場所格、NEG＝否定辞、OM＝目的語接辞、PL＝複数、PRF＝完了、PRS＝現在、PST＝過去、RM＝関係接辞、SG＝単数、SM＝主語接辞。1SG＝1 人称単数、1PL=1 人称複数、2SG=２人称単数、2PL＝2 人称複数、3SG=3 人称単数、3PL＝3 人称複数。スワヒリ語の名詞は「名詞クラス」と呼ばれるグループに分かれている（2 節参照）。名詞クラスとそれを基盤にした文法呼応のシステムはバントゥ諸語に共通する特徴であり、比較研究のために名詞クラスには一定の順番でクラス番号がつけられている。本稿でもその番号を用いて名詞のクラスを表す。名詞のグロスに付けた数字はその名詞が属している名詞クラス、名詞以外のグロスに付けた数字はその語や接辞が一致している名詞のクラスをそれぞれ表す。

ような構文を「主題主語文」と呼んでいる（中島 2000:25)。ただし「主題・主語・述語」の語順にならない以下のような例もある。

(4)　*Msitu-ni　wa-me-lal-a　simba.*

森-LOC18　SM2-PRF-寝る-F　ライオン 2

「森ではライオンが寝ている。」

(4)は、(1)~(3)と同じく、主題が文頭に置かれて、後ろに続く主語と述語（動詞）がその主題について解説するという構造だが、主語は動詞の後ろに置かれている。従って「主題・主語・述語」という語順にはなっておらず、中島のいう「主題主語文」にはあてはまらないが、本稿では、語順にかかわらず主題と主語の両方が現れるものをすべて「スワヒリ語のハガ構文」と呼ぶことにする。本稿では、スワヒリ語のハガ構文は何が主題化されたときに用いられるのか、そこにはどのような特徴や制限があるのかを考察する。また、ハガ構文に類似した 2 つの構文、「場所格倒置構文」および「全体部分構文」をハガ構文と比較し、それらの相違点についても検討する。

1. スワヒリ語の主題と主語

本論に入る前にスワヒリ語の主題と主語について説明する。スワヒリ語では、主題は文中の位置によって示される。スワヒリ語の基本語順は SVO であるが、主題化される成分は(1)~(4)でも示したように文頭に置かれる。主語に関しては、基本語順でも文頭に置かれるため、文頭に主語がある場合にそれが主題化されているか否かは文脈等からの判断しかできないが、主語以外の成分の主題化は明らかである。

主題が文中の位置によって示される一方、主語は文法呼応によって示される。スワヒリ語には名詞クラスとそれを基盤にした文法呼応のシステムがある(脚注 2 を参照のこと)。名詞クラスとは名詞を分類するグループのことで、スワヒリ語には 15 種類の名詞クラスがある。それぞれのクラスには独自の接頭辞があり、その接頭辞によって各名詞が属している名詞クラスが示される。名詞修飾語は被修飾名詞が属している名詞クラスに呼応した形で現れ、動詞には主語名詞や目的語名詞が属している名詞クラスに呼応した接辞が付けられる。

(5)　*Maji*　*ya-me-chemk-a.*

水 6　SM6-PRF-沸く-F

「お湯が／は沸いた。」

(6)　*Mtoto*　*wako*　*a-me-chemsh-a*　*maji.*

子ども 1　君の 1　SM1-PRF-沸かす-F　水 6

「君の子どもが／はお湯を沸かした。」

(5)では 6 クラスの *maji*「水」が主語で、動詞には 6 クラスに呼応した主語接辞 *ya-* が付いている。(6)では 1 クラスの *mtoto*「子ども」が主語で、動詞の語頭にある主語接辞 *a-* は 1 クラスに呼応した形である。つまりスワヒリ語において「主語」というのは、主語接辞と一致している名詞、ということになる[3)]。

2. スワヒリ語のハガ構文における主題

2.1.　何が主題化されているのか？

野田(1996:247)は、主題である「～ハ」がもともとどのような成分だったかという構造の面から、日本語のハガ構文を次のように分類している。

①格成分・副詞が主題	「この本は父が買ってくれた」型
②格成分の連体修飾部が主題	「象は鼻が長い」型
③述語名詞の連体修飾部が主題	「牡蠣料理は広島が本場だ」型
④被修飾名詞が主題	「辞書は新しいのがいい」型
⑤従属節の中の成分が主題	「この問題は解くのがむずかしい」型
⑥破格の主題	「この臭いはガスが漏れているよ」型

---

3) ただし有生名詞の場合は属しているクラスに関係なく、単数形であれば 1 クラス、複数形であれば 2 クラスの名詞として呼応する。

(i)　*Mbwa*　*a-na-bwak-a.*
犬 9　SM1-PRS-吠える-F
「犬 SG が／は吠えている。」

(ii)　*Vijana*　*wa-ta-ondok-a*　*hapa*　*kesho.*
若者たち 8　SM2-FUT-出発する-F　ここ　明日
「若者たちが／は明日ここを出発する。」

しかし、これらも主語接辞が主語名詞のクラスに一致していないだけで、(i)では *mbwa*「犬」、(ii)では *vijana*「若者たち」という主語名詞と呼応している。本稿では混乱を避けるために有生名詞のグロスには一致するクラス番号（1 クラス／2 クラス）を記すことにする。

以下、この分類に沿って、スワヒリ語ではどのような要素の主題化にハガ構文が用いられるのかを見ていく。

① 格成分・副詞の主題化

(7a)~(9a)は、動詞の格成分もしくは副詞が主題として文頭に置かれた例である。それぞれに対応する基本語順の例が(7b)~(9b)である。(7a)は目的語、(8a)は場所、(9a)は時がそれぞれ主題化され、いずれも主題化された名詞句が文頭に置かれている。

(7) a. *Jengo hili serikali i-li-tengenez-a.*
建物 5 この 5 政府 9 SM9-PST-建てる-F
「この建物は政府が建てた。」

cf.b. *Serikali i-li-tengenez-a jengo hili.*
政府 9 SM9-PST-建てる-F 建物 5 この 5
「政府が／はこの建物を建てた。」

(8) a. *Ua-ni wasichana wa-na-imb-a.*
裏庭-LOC 娘たち 2 SM2-PRS-歌う-F
「裏庭では娘たちが歌っている。」

cf.b. *Wasichana wa-na-imb-a ua-ni.*
娘たち 2 SM2-PRS-歌う-F 裏庭-LOC
「娘たちが／は裏庭で歌っている。」

(9) a. *Jana wa-li-kuj-a hapa watu wengi.*
昨日 SM2-PST-来る-F ここ 人々2 多くの 2
「昨日はたくさんの人がここに来た。」

cf.b. *Watu wengi wa-li-kuj-a hapa jana.*
人々2 多くの 2 SM2-PST-来る-F ここ 昨日
「たくさんの人が昨日ここに来た。」

(7a)と(8a)は主題・主語・動詞の語順、(9a)は主題・動詞・主語の語順であるが（この語順については 3.3 で検討する）、いずれも主語接辞と一致しているのは「～ガ」にあたる要素

である。格成分や副詞を主題化した(7a)~(9a)のようなハガ構文は、スワヒリ語では極めて生産的であり、自然な文として用いられている。

② 格成分の連体修飾部の主題化

(10a)と(11a)は、主語である「～ガ」の要素の所有者が主題として文頭に置かれている。それぞれに対応する基本語順の例が(10b)~(11b)である。

(10) a. *Tembo mkonga wake ni mrefu.* (=(3))
象1 鼻3 彼の3 COP 長い3
「(一般的に) ゾウは鼻が長い。」

cf.b. *Mkonga wa tembo ni mrefu.*
鼻3 of3 象1 COP 長い3
「(特定の) ゾウの鼻が／は長い。」

(11) a. *Mimi gari langu li-me-haribik-a.*
私 車5 私の5 SM5-PRF-壊れる-F
「私は車が壊れた。」

cf.b. *Gari langu li-me-haribik-a.*
車5 私の5 SM5-PRF-壊れる-F
「私の車が／は壊れた。」

(10)はコピュラ文、(11)は動詞文の例である。いずれも主題は主語の所有者という関係で、語順は主題・主語・述語である。主語の後ろには主題化された所有者の代わりに *wake*「彼の」や *langu*「私の」といった所有詞が置かれる。所有詞がない場合は、非文ではないが容認度はかなり低くなる。主題化された所有者の代わりに所有詞を入れることが条件にはなるが、主語の所有者を主題としたハガ構文も比較的生産的である。ただし(10)の例では、対象となる「ゾウ」が、ハガ構文を用いた(10a)と基本語順を用いた(10b)とで異なっている。ハガ構文の(10a)の場合には、特定のゾウを対象としているのではなくゾウ一般のことについて述べているのに対し、基本語順の(10b)の場合には、対象となっているのは特定のゾウである。

③ 述語名詞の連体修飾部の主題化

(12)と(13)はコピュラ文の述語名詞の連体修飾語を主題として文頭に置いた例である。

(12) a. *Upole* *hapa* *ni* *asili* *yake.*
優しさ 9 ここ COP 起源 9 その 9
「やさしさはここ（私）が起源だ。」

cf.b. *Hapa* *ni* *asili* *ya* *upole.*
ここ COP 起源 9 of9 優しさ 9
「ここ（私）が優しさの起源だ。」

(13) a. ?*Kiswahili* *Unguja* *ni* *asili* *yake.*
スワヒリ語 ザンジバル島 COP 起源 9 その 9
「スワヒリ語はザンジバル島がその起源だ。」

cf.b. *Unguja* *ni* *Asili* *ya* *Kiswahili.*
ザンジバル島 COP 起源 9 of9 スワヒリ語
「ザンジバルが／はスワヒリ語の起源だ。」

コンサルタントが唯一「問題ない」として出した例が(12)である。(13)やそれ以外の例については、非文ではないにしても自然な表現ではない。この関係の主題化はかなり限られていると言えそうである。また②の場合と同じく主題化された連体修飾語の代わりに述語名詞の後ろには所有詞が必要である。

④ 被修飾名詞の主題化

(14a)は、コピュラ文の主語名詞を主題化した例である。

(14) a.?? *Engini,* *mpya* *ni* *nzuri* *zaidi.*
エンジン 9 新しい 9 COP 良い 9 さらに
「エンジンは新しいのがより良い。」

cf.b. *Engini* *mpya* *ni* *nzuri* *zaidi.*
エンジン 9 新しい 9 COP 良い 9 さらに
「新しいエンジンはより良い。」

(14a)は非文ではないが、かなり不自然で容認度は極めて低い。語順的にも「被修飾名詞＋修飾語」が基本語順であるため、文頭にある名詞が主題であるとは解釈されにくく、(14b)のように基本語順の文として解釈されてしまうようである。

⑤　従属節の中の成分の主題化

例文(15) は、野田(1996)が従属節の中の成分を主題化した例として挙げている「この問題は解くのがむずかしい」をスワヒリ語にしたものである。

(15) a. **Maswali*　*haya*　*ku-(ya-)jibu*　*ni*　*ku-gumu.*
　　質問 6　この 6　15- (OM6)-答える　COP　15-難しい
　b. ?*Maswali*　*haya*　*ku-(ya-)jibu*　*ni*　*vi-gumu.*
　　質問 6　この 6　15- (OM6)-答える　COP　8-難しい
　　「この質問は答えることが難しい。」
　cf.c. *Maswali*　*haya*　*ni*　*ma-gumu*　*ku-(ya)-jibu.*
　　質問 6　この 6　COP　6-難しい　15-(OM6)-答える
　　「この質問は答えることがむずかしい。(These questions are difficult to answer.)」

(15)の「～ガ」の要素は 15 クラスの「答えること」である[4]。この *ku(ya)jibu* を主語として述語と一致させたのが(15a)であるが、これは非文である。しかしながら(15b)のように述語を 8 クラスに呼応した形 *vigumu* にすれば文は成立する。これは *maswali*「質問」(5 クラス)とも *ku(ya)jibu*「答えること」(15 クラス)とも一致していないため、どの名詞句が主語になっているのかが曖昧である。*vigumu* は副詞としても機能することから、*jibu*「答える」という動詞を修飾していると考えれば、(15b)はハガ構文であると言えるかもしれないが、いずれにしてもあまり自然な文ではない。また、そもそもこれは複文にはなっておらず、主題化されている *maswali haya*「この質問」は従属節の成分ではない。(16)のように動詞文の場合にはハガ構文は非文である。

---

[4] 15 クラスは動詞語幹に名詞クラス接頭辞 *ku-* をつけたものである。英語の *to* 付き不定詞や動名詞のような振る舞いをするが、スワヒリ語ではこれは 15 クラスに属する「名詞」として扱われる。

(16) a. **Matatizo* *haya* *ku-tatuliwa* *ku-na-tak-iw-a.*

問題 6　この 6　15-解決される　SM15-PRS-欲する-PSS-F

（この問題は解決されることが求められている。）

cf.b. *Matatizo* *haya* *ya-na-tak-iw-a* *ku-tatuliwa.*

問題 6　この 6　SM15-PRS-欲する-PSS-F　15-解決される

「この問題は解決されることを求められている。」

(15)や(16)のような主題化で最も自然な表現は、それぞれ(15c)と(16b)である。

⑥ 破格の主題化

野田(1996)では、①～⑤にあてはまらないものを「破格」の主題化とし、「この臭いはガスが漏れている」という例を挙げているが、これをそのままスワヒリ語にすると(17a)のように非文になる。

(17) a. * *Harufu* *hii* *gesi* *i-na-tok-a.*

におい 9　この 9　ガス 9　SM9-PRS-出る-F

（このにおいはガスが漏れている。）

cf. b. (*Na-siki-a*) *harufu* *baya.* *Harufu* *hiyo* *ni* *gesi.*

(SM1SG.PRS-感じる-F)　におい 9　悪い 9　におい 9　この 9　COP　ガス 9

「臭いにおい（がする）。このにおいはガスだ。」

このような場合には(17b)のように 2 文にするか、主題化するにしても、「～ハ」の要素を浮遊主題のように独立させるのが自然で、ハガ構文を用いることはない。

以上見てきたように、スワヒリ語においてハガ構文を用いることができるのは、格成分や副詞、主語の連体修飾部（所有者）を主題化した場合である（①と②）。述語名詞の連体修飾部と従属節中の成分の主題化（③）でもハガ構文を用いることが可能な場合もあるが、極めて限られており、また自然な表現ではないようである。それ以外の要素（④、⑤、⑥）の主題化ではハガ構文を用いることはできない。

2.2.　主題が主語接辞と一致する例

さて本稿では、「～ハ」の要素である主題と「～ガ」の要素である主語の両方が現れるものをハガ構文と呼んでいる。1 節でも述べたように、スワヒリ語の主語は主語接辞と一致する名詞句であり、上に挙げてきたハガ構文の例はいずれも「～ガ」の要素が主語接辞と一致していた。ところが、①格成分・副詞の主題化と②主語の連体修飾部の主題化には、「ハガ構文」のようでありながら主語接辞が「～ハ」の要素と一致するものがある。

(18)　*Nyumba-ni*　*hapa*　*pa-me-ja-a*　*watu.*
　　家-LOC16　この 16　SM16-PRF-満ちる-F　人々2
　　「この家は人が満ちている。」

(19)　*Mtoto*　*a-me-vimb-a*　*mguu*　*wa*　*kulia.*
　　子ども 1　SM1-PRF-腫れる-F　脚 3　of3　右
　　「子どもは右足が腫れている。」

(18)は①のなかの場所格の主題化、(19)は②のなかの主語の所有者の主題化である。日本語訳を見る限り、どちらも典型的なハガ構文のように見えるが、主語接辞が一致しているのは「～ガ」の要素ではなく文頭にある「～ハ」の要素である。文頭にある要素が主題であり、主語接辞と一致する要素が主語であるならば、(18)と(19)における「～ハ」の要素は主題と主語の両方を兼ねていることになり、「『～ハ』の要素である主題と『～ガ』の要素である主語の両方が現れる」という本稿のハガ構文にはあてはまらない。

(18)と(19)はそれぞれ、「場所格倒置構文(locative inversion)」、「全体部分構文」[5]と呼ばれる構文である。ハガ構文が生産的である①格成分・副詞の主題化と②主語の所有者の主題化には、ハガ構文だけでなく、さらにハガ構文に類似した別の構文もあるということになる。3 節と 4 節でこれらの構文についてそれぞれ詳しく見ていく。

3.　場所格倒置構文とハガ構文

3.1　場所倒置構文の形

場所格倒置構文は、スワヒリ語に限らずバンゥ諸語に広く見られる現象である(Bresnan

---

[5] 中島(2000)は「全体部分構造」、小森(1991)は「主語交替現象」、小森(2013)は「自動詞における『壁塗り交替』」と呼んでいる。

& Kanerva 1989, Harford 1990, Marten 2006, Lutz & Van der Wal 2014 他参照)。場所格倒置構文では、基本語順で「主語」であった要素（すなわち文頭にあり主語接辞と一致していた「～ガ」の要素）が動詞の後ろに置かれ、場所格の名詞句が主題化されて文頭に置かれる。主語接辞は、動詞の後ろに置かれた「～ガ」の要素ではなく、文頭に置かれた場所格名詞句と一致する。以下の例文は、それぞれ a が場所格倒置文、b がそれに対応する通常の語順の文である。

(21) a. *Ndani ya shimo hili* *m-na-ka-a* *nyoka*
この穴の中 18 SM18-PRS-棲む-F へび 2
「この穴の中にはヘビが棲んでいる。」

cf. b. *Nyoka* *wa-na-kaa* *ndani ya shimo hili.*
へび 2 SM2-PRS-棲む -F この穴の中 18
「ヘビが／はこの穴の中に棲んでいる。」

(22) a. *Nyumba-ni* *hapa* *pa-me-ja-a* *watu.* = (18)再掲
家-LOC16 この 16 SM16-PRF-満ちる-F 人々2
「この家は人が満ちている。」

cf. b. *Watu* *wa-me-ja-a* *nyumba-ni* *hapa.*
人々2 SM2-PRF-満ちる-F 家-LOC16 この 16
「人が／はこの家に満ちている。」

(23) a. *Ukumbi-ni* *ha-pa-ku-baki-a* *mtu.*
広間-LOC16 NEG-SM16-NEG.PST-残る-F 人 1
「広間には人が（誰も）残っていなかった。」

cf. b. *Mtu* *ha-ku-bakia* *ukumbi-ni.*
人 1 NEG.SM1-NEG.PST -残る-F 広間-LOC16
「人は（誰も）広間に残っていなかった。」

(24) a. *Chumba-ni* *ku-li-toke-a* *maafa.*
部屋-LOC17 SM17-PST-起きる-F 惨事 6
「部屋の中は惨事が起きた。」

cf. b. *Maafa* *ya-li-toke-a* *chumba-ni.*
惨事 6 SM8-PRF-起きる-F 部屋-LOC17
「惨事は部屋の中で起きた。」

場所格倒置構文では「～ガ」の要素は必ず動詞の後ろに置かれる。また「～ハ」の要素がなくても文は成立するが、「～ガ」の要素がなければ非文になる。

(25) a. *Chini ya ule mti* *pa-li-kuwapo* *wazee.*
あの木の下 16 SM16- PST-いる 老人 2
「あの木の下には老人たちがいた。」

b. **Chini ya ule mti* *wazee* *pa-li-kuwapo.*
あの木の下 16 老人 2 SM16- PST-いる
（あの木の下には老人たちがいた。）

c. *Pa-li-kuwapo* *wazee.*
SM16- PST-いる 老人 2
「老人たちがいた。」

d. **Chini ya ule mti* *pa-li-kuwapo.*
あの木の下 16 SM16- PST-いる
（あの木の下にはいる。）

3.2 場所倒置構文とハガ構文の比較

場所格倒置構文には、ハガ構文には見られない制限がある。まず場所格倒置構文をつくることができる動詞に制限がある。場所格倒置構文を作ることができるのは、出現、発生、存在、状態などを表す動作性の低い動詞（ただし「入る」「出る」「来る」「行く」はここに含まれる）だけで、動作性の高い動詞は場所格倒置構文にはできない。それに対し、ハガ構文には場所格倒置構文のような動詞の制限はない。

(26)a. **Chini ya ule mti* *pa-na-imb-a* *wazee.* 場所格倒置構文 (cf. 25a)
あの木の下 16 SM16-PRS-歌う-F 老人 2

b. *Chini ya ule mti* *wazee* *wa-na-imb-a.* ハガ構文
あの木の下 16 老人 PL2 SM2-PRS-歌う-F
「あの木の下では老人たちが歌っている。」

さらに「～ガ」の要素の定性にも違いがある。ハガ構文も場所格倒置構文も「～ハ」の

要素、すなわち主題があるため、「～ガ」の要素は主題性は低く、たいていの場合は新情報であると考えられるが、場所格倒置構文の場合はさらに不特定の名詞でなければならない。

(27) a. *Msitu-ni m-me-lala simba.* 場所格倒置構文
森-LOC18 SM18-PRF-寝る ライオン 2

b. *Msitu-ni wa-me-lala simba.* ハガ構文
森-LOC18 SM2-PRF-寝る ライオン 2
「森の中ではライオンが寝ている。」

(27)の例文は、いずれも「森の中ではライオンが寝ている」という日本語のハガ構文に訳せるが、場所倒置構文(27a)とハガ構文(27b)とでは、指している「ライオン」が異なる。ハガ構文は「ライオン」を新情報として提示する場合だけでなく、選択や対比の場合にも用いることができる。また不特定のライオンの場合だけでなく、むしろ特定のライオンが寝ているという場合に用いられることが多い。一方、場所格倒置構文の場合は不特定のライオンに限られる。この違いは以下のような例を見ると明確である。

(28) a. *Hapo pa-li-kuwapo sungura.*
そこ 16 SM16-PST-いる ウサギ 1
「そこには一匹のウサギがいました。」

b. **Hapo pa-li-kuwapo Tom.*
そこ 16 SM16-PST-いる トム 1
（そこにはトムがいました。）

まとめると、場所格倒置構文には、①動作性の高い動詞では作れない、②「～ガ」の要素が特定の名詞を指す場合には作れない、といった制限がある。一方、ハガ構文にはこのような制限がなく、動作性の高い動詞でも、「～ガ」の要素が定でも不定でも、ハガ構文を作ることができる。

3.3 SV 語順と VS 語順の比較

場所の主題化にはハガ構文と場所格倒置構文の 2 とおりがあるが、それだけでなく、ハ

ガ構文には、主題の後ろに「主語・動詞」という語順で続くもの（以下 SV 語順）と「動詞・主語」の語順で続くもの（以下 VS 語順）の 2 種類がある。

(29) a. *Ua-ni* *wasichana* *wa-na-chez-a.* ハガ構文（SV）
裏庭-LOC16 娘たち 2 SM2-PRS-踊る-F
b. ?? *Ua-ni* *wa-na-chez-a* *wasichana.* ハガ構文（VS）
裏庭-LOC16 SM2-PRS-踊る-F 娘たち 2
cf. c. **Ua-ni* *pa-na-chez-a* *wasichana.* 場所格倒置構文
裏庭-LOC16 SM16-PRS-踊る-F 娘 2
「裏庭では娘たちが踊っている。」

(30) a. *Msitu-ni* *nyoka* *wa-na-ka-a.* ハガ構文（SV）
森-LOC18 へび 2 SM2-PRS-棲む-F
b. *Msitu-ni* *wa-na-ka-a* *nyoka.* ハガ構文（VS）
森-LOC18 SM2-PRS-棲む-F へび 2
cf. c. *Msitu-ni* *m-na-ka-a* *nyoka.* 場所格倒置構文
森-LOC18 SM18-PRS-棲む-F へび 2
「森の中はヘビが棲んでいる。」

3.2 で見たように(29) *cheza*「踊る」のような動作性の高い動詞の場合は場所格倒置構文にすることはできないが、それだけでなく VS 語順にすると容認度が低くなる。一方、(30)*kaa*「棲む」のように動作性が低く場所格倒置構文を作ることができる動詞の場合は、どちらの語順でもいける。コンサルタントから出てくるのはいつも VS 語順のほうが先であり、VS 語順のほうがより自然であるような印象も受けるが、(31)のように動作性が低く場所格倒置構文にすることができる動詞であっても SV 語順を続けたほうが自然なものもある。

(31)a. *Juu ya meza* *kikombe* *ki-me-vunjika.* ハガ構文（SV）
机の上 16 コップ 7 SM7-PRF-割れる
b. ?*Juu ya meza* *ki-me-vunjika* *kikombe.* ハガ構文（VS）
机の上 16 SM7-PRF-割れる コップ 7

c. *Juu ya meza* *pa-me-vunjika* *kiokmbe.* 場所格倒置構文

机の上 16 SM16-PRF-割れる コップ 7

「机の上ではコップが割れている。」

cf. d. *Kikombe* *ki-me-vunjika* *juu ya meza.* 基本語順

コップ 7 SM7-PRF-割れる 机の上 16

「コップが机の上で割れている。」

場所格倒置構文を作ることができない動作性の高い動詞については、常に SV 語順のほうが自然であるが、場所格倒置構文を作ることができるような動作性の低い動詞については、(31)のような例もあるため、VS 語順の容認度が低くなる場合の条件を、さらに詳しく検討する必要である。

さて、場所格倒置構文とハガ構文のあいだには「～ガ」の要素の定性の違いがあったが、SV 語順と VS 語順にも「～ガ」の要素の定性に違いが見られる。

(32) a. *Hema* *hili* *watu* *watano* *wa-na-wez-a* *ku-lala.* SV 語順

テント 5 この 5 人々 2 5 人 SM2-PRS-できる-F INF-寝る

b. *Hema* *hili* *wa-na-wez-a* *ku-lala* *watu* *watano.* VS 語順

テント 5 この 5 SM2-PRS-できる-F INF-寝る 人々 2 5 人

「このテントは 5 人が寝られる。」

(32)の例では SV 語順も VS 語順も同じくらいに自然である。ところが「彼ら 5 人」のように「5 人」を特定する語を加えると、VS 語順は少し容認度が下がる。場所格倒置構文については 3.2 でも述べたとおり非文になる。

(33) a. *Hema* *hili* *watu* *wale* *watano* *wa-na-wez-a* *ku-lala.*

テント 5 この 5 人々 2 彼ら 5 人 SM2-PRS-できる-F INF-寝る

b. ?*Hema* *hili* *wa-na-wez-a* *ku-lala* *watu* *wale* *watano.*

テント 5 この 5 SM2-PRS-できる-F INF-寝る 人々 2 彼ら 5 人

c. **Hema* *hili* *li-na-wez-a* *ku-lala* *watu* *wale* *watano.*

テント 5 この 5 SM5-PRS-できる-F INF-寝る 人々 2 彼ら 5 人

「このテントは彼ら 5 人が寝られる。」

ここで注目したいのは、場所格倒置構文を用いた(33c)が非文であるのに対し、VS 語順の(33b)は非文ではないことである。つまり、場所格倒置構文の場合に「～ガ」の要素は不特定でなければならないのに対し、VS 語順ハガ構文の場合は、「～ガ」の要素が不特定でなければならないわけではない。したがって SV 語順と VS 語順の「～ガ」の要素の定性の違いは、定か不定かといった二極ではなく、定性のレベルの違いであると考えられる。場所格倒置構文の場合には「～ガ」の要素は必ず不特定であるため、(34)の「5 人」は不特定の 5 人であり、「5 人用のテント」といった意味になる。特定の 5 人を思い浮かべている場合には(34)を用いることはできない。

(34) *Hema* *hili* *li-na-wez-a* *ku-lala* *watu* *watano.*
テント 5 この 5 SM5-PRS-できる-F INF-寝る 人々2 5 人
「このテントは 5 人用です（＜このテントは 5 人が寝られる）。」(中島 2000: 274)

3.4　3 種類の場所格の主題化

場所格の主題化についてここまで見てきたことをまとめてみよう。場所格の主題化には以下の 3 種類があり、それらにおける「～ガ」の要素の定性のレベルは(35)に示すような関係にある。

場所格の主題化　・ハガ構文：主題＋SV 語順
・ハガ構文：主題＋VS 語順
・場所格倒置構文

(35)　ハガ構文(SV 語順) ＞ハガ構文(VS 語順) ＞ 場所格倒置構文

(35)では、左のほうが定性のレベルが高く、右に行くほど定性は低くなり、右端は不定不特定の新情報である。言い換えれば、これは「いかに主題性が低いか」ということでもある。これらの構文はいずれも文頭に主題があるため、「～ガ」の要素の主題性は総じてそれほど高くないはずであるが、その中でも、右端にある場所格倒置構文の「～ガ」の要素は、最も主題性が低く主語らしくない「～ガ」の要素であると言える。

スワヒリ語では、主語に対して主題性の高さが大前提として期待される。だからこそ主

題性が極限まで低くなってしまうと、本来主語であったはずの「~ガ」の要素は「主語」の資格を失ってしまう。ハガ構文 SV 語順の場合は、文頭に主題が置かれてはいるものの、主語は「動詞の前」という「主語の定位置」を保っている。主題性がそれよりも低くなると、主語は主語の定位置を離れ、動詞の後ろに置かれる。これが VS 語順のハガ構文である。この段階ではまだ主語接辞は「～ガ」の要素と一致している。つまり「主語」の資格を持っている。しかしながら、さらに主題性が低い場所格倒置構文になると、もはや「主語」という文法役割を保つこともできなくなり、主語接辞と一致する「主語」の座を主題に譲っていしまう、という図式が考えられる。これは、主語の主題性がどんなに低くなっても主語は主語としてガ格で現れる日本語や主語接辞との一致が保たれるマテンゴ語(Yoneda 2011)とは対照的である[6]。

4. 全体部分構文とハガ構文

2.1 で見た格成分の連体修飾部が主題化されたハガ構文では、「～ハ」の要素が「～ガ」の要素の所有者という関係にあったが、そこに単なる所有関係だけでなく、ヒトとその身体部位や分泌物、あるいはモノとその一部といった不可譲渡の関係がある場合には、全体部分構文と呼ばれる構文を用いることができる。全体部分構文では、ヒトやモノが「全体」、身体部位やモノの一部（分泌物も含む）が「部分」として捉えられる。「全体」が「～ハ」の要素として文頭に置かれると、主語接辞は「～ハ」の要素と一致し、「～ガ」の要素である「部分」は動詞の後ろに置かれる。(36)では、「～ハ」の要素が *mtoto*「子ども」、「～ガ」の要素が *jasho*「汗」、(37)では、「～ハ」の要素が *kiti hiki*「この椅子」、「～ガ」の要素が *miguu*「脚」で、いずれも「～ハ」の要素と「～ガ」の要素のあいだに「全体」と「部分」の関係がある。

(36) a. *Mtoto* *a-na-tok-a* *jasho.* 全体部分構文
子ども 1 SM1-PRS-出る-F 汗 5

b. *Mtoto* *jasho* *li-na-m-tok-a.* ハガ構文（SV 語順）
子ども 1 汗 5 SM1-PRS-OM1 出る-F
「子どもは汗が出ている。」

---

[6] マテンゴ語はスワヒリ語と同じくバントゥ諸語のひとつであるが、主題性に関係なく常に「～ガ」の要素が主語接辞と一致する。なお、マテンゴ語には場所格倒置構文が存在しない。

c. **Mtoto li-na-m-tok-a jasho.* ハガ構文（VS 語順）

子ども 1 SM1-PRS-OM1-出る-F 汗 5

(37)a. *Kiti hiki ki-me-vunjik-a miguu miwili.* 全体部分構文

椅子 7 この 7 SM7-PRF-折れる-F 脚 4 2 本 4

b. *Kiti hiki miguu (yake) miwili i-me-vunjik-a.* ハガ構文（SV 語順）

椅子 7 この 7 脚 4 その 4 2 本 4 SM4-PRF-折れる-F

「この椅子は足が 2 本折れている。」

c. **Kiti hiki i-me-vunjik-a miguu miwili.* ハガ構文（VS 語順）

椅子 7 この 7 SM4-PRF-折れる-F 脚 4 2 本 4

(36a)と(37a)は全体部分構文、(36b)と(37b)はハガ構文の例である。

「～ハ」の要素はどちらの構文でも文頭に置かれるが、「～ガ」の要素は、全体部分構文の場合は動詞の後ろ、ハガ構文では動詞の前に置かれている。ハガ構文のほうは、主語接辞は「～ガ」の要素と一致しているが、全体部分構文では主語接辞が「～ハ」要素（「全体」）と一致する。

「～ハ」の要素と「～ガ」の要素のあいだに不可譲渡の関係がある場合のハガ構文は、「全体」がヒトかモノかによって現れ方が異なっている。(36b)が示すように「全体」がヒトの場合のハガ構文では主語接辞が「～ガ」の要素と一致しているが、「～ハ」の要素 *mtoto* 「子ども」と一致する目的語接辞が新たに加えられる。ところが(37b)を見ると、モノの場合のハガ構文には「全体」と一致する目的語接辞は挿入されない。

また全体部分構文においても「全体」がヒトかモノかによって異なるふるまいを見せる。「全体」がヒトの場合の全体部分構文では動詞の後ろの「～ガ」の要素は必須であるが、「全体」がモノの場合には、動詞の後ろに「～ガ」の要素がなくても文は成り立つ。

(38) a. *Mtoto a-me-vunjik-a mguu.*

子ども 1 SM1-PRS-折る-F 脚 3

「子どもは脚が折れている。」

b.* *Mtoto a-me-vunjik-a.*

子ども 1 SM1-PRS-折る-F

（子どもが／は（どこかが）折れている。）

(39) a. *Kiti* *ki-me-vunjik-a* *mguu.*

椅子 7 SM7-PRS-折る-F 脚 3

「椅子は脚が折れている。」

b. *Kiti* *ki-me-vunjik-a .*

椅子 7 SM7-PRS-折る-F

「椅子が／は折れている（＝壊れている）。」

さて、(36a)や(37a)のような全体部分構文と(36b)や(37b)ようなハガ構文がどのように使い分けられているのか、そこにどのような意味やニュアンスの違いがあるのかといったことについては、現時点では明らかになっていない。全体部分構文とハガ構文の違いについてはさらなる調査と検討が必要であるが、少なくとも場所格倒置構文とハガ構文とのあいだに見られたような「～ガ」の要素の定性の違いは見られない。「～ガ」の要素は、全体部分構文でもハガ構文でも「～ハ」の要素の「部分」であり、不特定ではありえない。前述のとおり、場所格倒置構文において「～ハ」の要素が主語接辞と一致するのは「～ガ」の要素の主題性が著しく低いために主語の資格を失っているからではないかと考えられるが、全体部分構文の場合には、「～ガ」の要素は特定であり、ハガ構文における「～ガ」の要素と差があるわけではない。(39)のような例を見ると、全体部分構文において主語接辞が「～ハ」の要素と一致するのは、まさにそれが不可譲渡の関係、すなわち一体とみなされているからではないかと思われる。つまり、「椅子の脚」が折れたのは「椅子」が折れたのと同じことであるという考え方である。次のような例もそれを裏付けている。

(40) *Maria* *a-li-ni-suk-a* *nywele* (*zangu*).

マリア 1 SM1-PST-OM1SG-編む-F 髪 10 私の 10

「マリアは私の髪を編んだ。」

マリアが編んだのは「私の髪」であるが、(40)では「私」が目的語として現れている。つまり「私の髪」を編んだことは、言い換えれば「私」を編んだことになる[7]。

---

[7] 以下の例文のように *nywele*「髪」を目的語にすると、例えば「私が所有する付け毛」のような場合には用いられるが、「私自身の髪」という意味では容認度が極めて低くなる。

(iii) ?? *Maria* *a-li-zi-suk-a* *nywele* *zangu.*

マリア 1 SM1-PST-OM10-編む-F 髪 10 私の 10

5. 終わりに

本稿では、スワヒリ語における「ハガ構文」、すなわち主題と主語の両方の要素が現れる文について見てきた。まず、スワヒリ語ではどのような要素が主題化された場合にハガ構文を作ることができるのかを検討した。スワヒリ語においてハガ構文が用いられるのは、格成分・副詞の主題化、および主語の所有者である連体修飾部の主題化である。これらの主題化には、ハガ構文の他に、場所格倒置構文、全体部分構文と呼ばれる構文がそれぞれ存在する。これらの構文は、いずれも主題が主語接辞と一致するため、「主題と主語の両方の要素が現れる」というハガ構文の定義からは外れてしまうが、意味的にはハガ構文によく似ている。そこで、これらの構文についても検討し、ハガ構文との比較を行った。

場所格倒置構文についての先行研究は少なからずある。しかしながらハガ構文との比較、特にそれぞれの「～ガ」の要素の定性のレベルについての議論はなされてこなかった。本稿では、場所格倒置構文と語順の異なる 2 種類のハガ構文とのあいだには「～ガ」の要素の定性に違いがあること、場所格倒置構文の場合には「～ガ」の要素は不定・不特定でなければならないが、ハガ構文の場合は不定・不特定である必要はないこと、ハガ構文の 2 種類の語順のあいだには定性のレベルの違いが見られることを明らかにした。

中島(2000)は、場所格倒置構文について、「場とその場に含まれる存在物がそれぞれ全体と部分としてなす構造」（中島 2000: 275）であって、「それは倒置でもなく例外的表現でも慣用表現でもない。全体と部分に関してどれを主語にし、どれを補足語とするかの問題」(中島 2000: 276)であるとしている。つまり場所格倒置構文は全体部分構文のひとつとして扱っている。しかしながら、見てきたように、場所格の主題化において場所格倒置構文とハガ構文の違いは、「～ガ」の要素の定性・特定性の違いである。一方、全体部分構文の場合には、ハガ構文とのあいだに「～ガ」の要素の定性や特定性の違いは見られない。さらに全体部分構文の「～ガ」の要素は、モノを「全体」とする全体部分構文においてはそれがなくても文が成立するのに対し、場所格倒置構文における「～ガ」の要素は、文を統語的に成立させるためだけでなく情報的にも必須の新情報であり、「補足語」として捉えられる要素ではない。これらのことを考えると、場所格倒置構文は、全体部分構文とは別の、独立した構文として捉えるべきであろう。

本稿では、スワヒリ語のハガ構文及びハガ構文と類似した構文について見てきたが、場所格の主題化に重点が置かれ、全体部分構文についての十分な分析ができなかった。特に全体部分構文とハガ構文の違いは、今の時点ではまったく明らかになっていない。また場

所格の主題化に関しても、場所格倒置構文とハガ構文の違いについては論じることができたが、SV 語順と VS 語順のどちらの語順が好まれるのかを決定する条件については十分な説明ができなかった。未解決の点も少なくないが、これらについては、今後さらにデータを収集し、検討していきたいと考えている。

参考文献

Bresnan, Joan & Jonni M. Kanerva. 1989. Locative Inversion in Chichewa: A case study of factorization in grammar. *Linguistic Inquiry*. 20(1), 1-50.

Harford, Carolyn. 1990. Locative inversion of Chishona. In Hutchison & Manfredi (eds.) *Current Approaches to African Linguistics* 7.Dordrecht: Foris. 137-144.

Marten, Lutz. 2006. Locative inversion in Otjiherero: More on morpho-syntactic variation in Bantu. *ZAS Papers in Linguistics*. 43, 97-122.

Marten, Lutz & Jenneke van der Wal. 2014. A typology of Bantu subject inversion. *Linguistic Variation* 14(2), 318-367.

Yoneda, Nobuko. 2011. Word order in Matengo (N13): Topicality and informational roles. *Lingua*. 121(5), 754-771.

小森淳子. 1991. 「スワヒリ語に見られる主語交替現象について」『言語学研究』10, 1-22.

小森淳子. 2013. 「スワヒリ語のいわゆる『壁塗り交替』構文について」『スワヒリ＆アフリカ研究』24, 159-170.

中島　久. 2000.『スワヒリ語文法』東京：大学書林.

野田尚史. 1996. 『「は」と「が」』東京：くろしお出版.

米田信子. 2015.「スワヒリ語の場所格の主題化」『日本語学』34(12), 68-76.